





バルザック全集

2

東京創元社

バルザック全集 第二巻



昭和四十八年十一月十日 発行

訳者

安子 古田 幸男  
し 正 夫  
た 正 夫  
ゆき 正 夫  
お 正 夫

発行所

(株) 東京創元社  
代表者 秋山孝男

(192) 東京都新宿区新小川町一―一六  
電話 東京(〇三)二六八一―八三三二  
振替 東京 一五五六五

印刷・相馬印刷株式会社  
製本・株式会社鈴木製本所  
用紙・北越製紙・富士川洋紙店

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

バルザック全集  
第二卷  
目次

# 結婚の生理学

## 序説

## 第一部 総論

考察1	主題	．．．．．	一九
考察2	夫婦の統計	．．．．．	二二
考察3	淑女について	．．．．．	三三
考察4	貞節なる女について	．．．．．	三六
考察5	予定された人々について	．．．．．	四〇
	夫婦に関する教理問答		
考察6	寄宿学校について	．．．．．	四四
	問題		
考察7	ハネ・ムーンについて	．．．．．	五三

公理

考察 8	最初の徴候について	八
考察 9	エピソード	三

第二部 内外の防衛手段について

考察 10	夫の術策論	九
考察 11	家庭教育について	一〇
考察 12	結婚の衛生学	一一
考察 13	個人的手段について	一七
考察 14	住居について	二四
考察 15	税関について	二九
考察 16	夫婦の憲章	三四
考察 17	ベッドの理論	三四
	1 対に並ぶ二つのベッド	
	2 別々の部屋について	
	3 ただ一つのベッドについて	

考察 18 夫婦の革命について……………二六

考察 19 愛人について……………二六

考察 20 警察論……………二六

1 ねずみ捕りについて

2 通信について

3 スパイについて

4 禁書目録

5 予算について

考察 21 帰宅の方法について……………二六

考察 22 局面転換について……………二九

### 第三部 内乱について

考察 23 宣言について……………二九

考察 24 戦略の諸原則……………二九

考察 25 同盟者について……………二九

1 結婚との関係において考察した  
宗教と告白について

2 義母について

3 寄宿学校の友だちと親友について

4 愛人の同盟者について

5 小間使について

6 医者について

考察26 さまざまな武器について . . . . .三三〇

1 偏頭痛について

2 神経症について

3 結婚に関する羞恥心について

考察27 終末の徴候について . . . . .三三六

ミノタウロスに関する諸考察

最後の公理

考察28 賠償について . . . . .三三〇



考察29 夫婦の和睦について……………三六

考察30 結び……………三六

付記……………三六

訳 注……………三七

解説……………三五

装幀 松田正久

# 結婚の生理学

夫婦の幸福と不幸に関する  
折衷哲学的考察

安田正夫  
古田幸男  
訳

## 献呈の辞

次の言葉（三八頁）に御注意いただきたい。「この書をささげる優れた男性」かくいうは「あなたにささぐ」ということではあるまいか？ 著者

この本の表題を見て開いてみようという気になる女性ならば、もうそんなことをしなくてもよろしい。そういう女性は、自分でも知らないうちに、もうこの本を読んでしまっているのである。男というものは、どんなに意地悪くなったところで、女性が女性自身に關して考えているほどには、ほめ言葉も悪口も女性について言わないものである。さすれば、この忠告にもかかわらず、ある御婦人がなおもこの著作を読みたいと申されるならば、筆者としては芸術家をもっとも喜ばせる称讃の言葉を断念してまでも、若干の建物の扉に付けられた『御婦人はここに入るべからず』という用心深い銘を、いわばこの本の扉に刻んでおいたのだから、さぞかしその御婦人としては、思いやりからいっても筆者を悪しざまに言ってはならぬという掟にしばられるにちがいないまい。



## 序 説

「結婚というものは決して自然にその源を發するものではない。——東洋の家族と西洋の家族とはまったく別物である。——人間は自然の意志の代行者であつて、社会は自然という台木の上に接木されたものである。——法律は風俗習慣のために作られており、その習慣は多種多様である」

「したがつて結婚というものも、人間に関するあらゆる事柄が否応なく従わざるを得ないらしい段階的な改良の過程を、順次経過して完成にむかう余地がある」

ナポレオンが『民法典』の討議の際に參事院で吐いたこの言葉は、本書の著者である私に激しい感銘をあたえた。

おそらくはこの言葉が知らぬ間に、今日読者にたいし提供する本書の萌芽を筆者の中に蒔いたのである。事實、筆

者がまだたいへん若くフランス法を勉強していた時代に、

「姦通」という言葉に出あつて異常な印象を受けたことがある。法典の中では無限のひろがりを持つこの言葉は、筆者の想像裡にきまつて陰惨なおともの群れを後にしたがえて現われたものだ。歎きの涙、憎しみ、恥辱、恐怖、ひそかな犯罪、血みどろなたたかい、家長を失つた家庭、不幸、そういつたものが「姦通」という決定的な言葉を讀むたびにたちまち筆者の前に具体的な形をもつて立ちあらわれたものである。後になって、社会の中でもっともひらけた浜辺に着いた際、筆者は夫婦の掙の厳しさがそこではかなり一般的に姦通によってゆるめられていることに気がついた。不幸な家庭の總計が、幸福な結婚の合計よりもはるかにうわまわつていることもわかつた。結局のところ筆者は、あらゆる人間の知識のうちで結婚の知識がもっとも進んでいないのだということに、自分が真先きに気づいたように思つたのである。しかしこれは青年らしい觀察であつた。そうしてこの觀察は、多くの若者たちにおけるのと同様私の中においても、湖の真ん中に投げこまれた石にも似て、立ちさわぐかずかすの思惟の渦の中にもあらず見ることが出来てしまつた。しかしながら筆者はわれにもあらず見るべきところはやはり見ていたのである。ついで筆者の頭の中に、夫婦に関する事柄の性格について多少なり正確な觀念が、蜜蜂の巣のようにおもむろに形成されていつたのだ。著作というものは、たぶん、ペリゴールの香りたかい平原のまつただなかにフランス松露が生えるのと同じく神秘的

に、魂の中に形成されるものなのであろう。姦通という言葉葉がひきおこした原始的かつ神聖な恐怖の情と、その気もなくて行なつた観察とから、ある朝、筆者の諸観念がはっきり表明されているある微少な思想が生まれたのである。それは結婚に対する一つの抑捺であつて、夫婦が二十七年の家庭生活の後に初めて愛しあうという話だつた。

筆者は、この夫婦諷刺の小パンフレットを面白がつて、まる一週間の間というもの、この罪のない警句のまわり、自分でも知らぬうちに獲得しててこんなものがあつたかと驚くような、無数の観念をよせあつては、甘美な時をすごした。この戯れ言はある教師然たる叱言をくらつて意氣銷沈してしまつた。人々の忠告に従順な筆者は、もとの怠惰な習慣の気やすさにひっこんだものである。とはいへ、知恵と諧謔のこの軽い種子は、思惟という畑でひとりで成長していった。非難されたこの著作の一つ一つの言葉が、そこに根をおろして堅固なものとなり、あたかも冬の夕暮れ時、砂の上ですてられながらも翌日には前夜の急激な寒さがうき出させる白い奇怪な形の樹氷におおわれるあの小枝のごとくに残つたのである。かようにして、その草稿は生きつづけ、無数の精神的枝葉の出発点となつた。それはあたかも自己生殖する粘膜瘤のようなものであつた。青年時代の感覚や、本人でさえ手をやく押しつけがましい力がさせた観察が、きわめて些細な出来事にまで支点を見つけた。さらにまた、こうした群れなす諸観念は互いに折り合いをつけ、活気づき、ほとんど人格化して、

魂が、その氣違ひじみた生みの子どもをうるつかせたがる幻想的な国々の中を進んでいったのである。世間のこと、生活のことに氣をうばわれているさいちゆうでも、筆者の中にはいつも一つの声があつた。踊つたり笑つたりしゃべつたりしている女を、無上のよろこびをもって観察しているまさにその瞬間にも、その声は筆者にきわめて皮肉な啓示をもたらずのであつた。あたかもプロッケンの山のおそるべきらんちきざわざわぎの中で、メフィストフェレスがファウストに不吉な物の象を指し示すように、筆者は、舞踏会の真ん中でいかにも親しげに肩をたたいて「見たかね、あの心をとるかすような笑ひを？ あれは憎惡の微笑さ」とささやかに来る惡魔を感じたものである。惡魔は、ある時はアルデイの古い喜劇にあらわれる空威張りの男のように肩で風をきつて歩いてきた。彼は刺繍をした緋のマントの埃をはらい、自慢の古ぼけた金ピカ衣裳を新しく見せようとつとめていた。ある時はラブレール風に磊落瀟灑な笑い声をあげ、街の壁の上に、徳利大明神が告げた唯一の御宣託「飲め！」という言葉に呼応するような言葉を書くのだった。

しばしばこの文学的トリルビーは書物の山の上に腰かけた姿を見せた。そうして、指を鉤がたにまげて、表題が目にくらめく黄ばんだ二冊の本を、いたずらっぽく指したものである。それから、筆者が目をごらして読みとらうとしているのを見ると、グラス・ダルマシーの音のように齒のうくような声で綴りを読んだ——「結婚の生理學」。それよりもなお彼は、ほとんどいつも晩になって夢を見る時刻に

姿をあらわすのだった。仙女のようにやさしく愛撫して、すでに彼に屈服してしまつた魂を甘い言葉でいっそう手なすけようと試みた。女のようにしなやかに気をそそのかと思えば、虎のように残酷にもあそび、誘惑的でありながら嘲笑的な彼の友情は、彼の敵意よりもはるかに恐ろしいものであった。なぜなら、彼は引つかき傷をつくらぬように愛撫する法を知らないからである。とくにある夜のこ

と、彼はおのれの持つあらゆる妖術の効能をこころみ、最後の努力をつくすことによつて勝利の栄冠を妖術にかちとらせたのである。あたかも恋心に満ちあふれて初めて口をつぐんでいるが目はきらきら輝き、ついにその心のうちを洩らしてしまう乙女のように、そばにやつてきて寝台の端に腰をおろすところいった。「こいつは足を濡らさずにセーヌ河の上を散歩できるという浮き袋の宣伝文だぜ。もう一冊はやけどしないで火の中を通れる着物についての学士院の報告書だ。そこでどうかね、寒さ暑さの不幸から結婚を守る事ができるようなものを書いてみようという気にはならないかね? まあ、ききたまえ。ここにある本はね、それ、『食料品保存法』、『暖炉のいぶるのを防ぐ法』、『良質の漆喰を作る法』、『ネクタイを結ぶ法』、『肉の切り方』」彼は一分間のあいだに、筆者が目をまわすくらいとほうもない数の本の名をあげた。

「こういう数万の本がむさぼり読まれて来たんだ。だがね、みんながみんな家を建てたわけじゃないし、満足に食べられるわけでもない。みんながみんな、ネクタイを持つ

ているはずもないし、暖炉にあたつていられるはずもない。ところが結婚だけはどうやらみんなちよつとはするものなのさ! まあ、見たまえ!」

そのとき、彼の手が動いて、現代のあらゆる書物があたかも波のうねりにゆれられるように動いている大洋を、遠いかなたに出現させたように見えた。十八折版の本は跳ねあがり、投げこまれた八つ折本は鈍い音をたてて底に沈んで、ぶよぶよにふくれて軽い泡と溶けている十二折本や三十二折本にじやまされるものだから、ひどい苦勞をしなければ浮きあがれなかった。狂乱怒濤はジャーナリストや印刷所の監督や職人や見習や注文取りをいっぱいおせていて、見えるものといつたら本とごたまぜになつたかれらの頭だけだった。数千の声がまるで風呂に入っている学校の生徒の声のようにわめいていた。数人の男がボートにのつて行ったり来たりして、一心不乱に本をつりあげては、岸辺にいたる黒衣をまとつた、無愛想で、冷淡で、背が高く、いばりくさつたひとりの男の前に運んでいた。それが本屋であり読者というものだった。指で悪魔は、順風をいばい帆にはらみ旗の代りに一枚の広告を高くかかげ新しく満艦飾にかざつて疾走する一艘の小舟を示した。そうして、せせら笑いをしながら胸をえぐるような声でポスターを読んだ。「結婚の生理学」

筆者が恋をするようになると、悪魔は筆者をほつておいた。女の住みついた住家に、なまじ姿をあらわそうものなら、あまりに手ごわい者を相手にしなければならなかつた



からであろう。数年の間は恋の悩みのほかの悩みを味わわずに過ぎた。筆者は一方の病まいのおかげで他方の病まいから癒いえたものと思ひこむことができたのである。ところが晩、パリのあるサロンにいた時、暖炉の前で数人の者とまるく輪をつくっていた男のうちのひとり口を切り、墓の底から出るような陰気な声で、こんな挿話を語ったのである。

「私が住んでいた頃、ガン市＊でこんな事件がありました。十年前に夫をなくして後家ごけになった貴婦人が死病にとりつかれて床についていたのです。三人の傍系相続人たちは、彼女が町のベギーヌ会のために遺言書を作りはしまいかと心配して、そばをはなれず、最後の息をひきとるのを待っていました。病人は一言も口をきかず、見たところまどろんでいるようで、徐々に死が彼女のおしだまつた鉛色の顔をとらえてゆくように見えました。冬の夜のさなか、ベッドの前に黙々とすわっている三人の縁者の姿が、諸君、見えますか？ 年をとった看護婦がそこにいて頭をふっているし、医者いしやは憂うつなようすで、病気が最後の段階にきているのを見て、片方の手に帽子をつかみ、もう一方の手で近親者にむかって、『もう診察に来る必要はありませんな』といったような身ぶりをしたものです。厳肅な沈黙が、鑑戸かたどにうちつける鑿をの、陰にこもった鈍い音を耳にひびかせました。死にかかった女の目に光がまぶしくなくいようにと、相続人のうちで一番若い男がベッドのそばにおか

れたローソクにおおいをかけたので、燭台の光の輪はやつと死の枕元にとどくかとかぬくらいになり、枕の上の病人の黄ばんだ顔は、ちようどくすんだ銀の十字架の、金箔もはげ落ちたキリスト像のように浮きだしてみえました。こうして、パチパチはねる暖炉の青い焰が投げかけるゆるめくほのかな光だけが、一つの劇がいまや終ろうとしているこの陰気な部屋を照らしていたのです。果たして、あたかも一つの出来事を予告するかのように、いきなり、燃えさしがつ、暖炉からはめ木の床にころがり出たのです。この物音で病人は、いきなり、ねていたところに立ちあがり、両の目をまるで猫の目のようにかっと見開きました。いあわせた者は仰天して彼女を見つめました。病人は燃えさしがころがるのを見つめています。そして、一種の精神錯乱から生まれた思いがけない動きを制止しようと思う間もあらばこそ、彼女はベッドからとび出して火箸ひざしをつかみ、暖炉にその炭をなげこみました。看護婦も医者も縁者たちも、飛びかかって病人を抱きかかえました。病人はもとのようにねかさされ、頭を枕につけました。数分たつたため間に彼女は死にしましたが、死んでから後もまだ視線は、最前燃えさしがさわったはめ木の床の、一枚の板に釘づけになっていました。このヴァン・オストロアン伯爵夫人が息をひきとるやいなや、三人の共同相続人たちは互いに疑惑の視線をかわしあい、もはや伯母のことなど考えもしないで、この神秘的なはめ木の床を示しあいました。彼らはベルギー人だったから、心中の打算も彼らの視線と同じくら